

Folktales を読む

——物語の力——

ウェルズ恵子

The Power of Stories: An Interpretive Approach to Folktales

Abstract

This essay introduces 5 folktales from the Navaho, Norwegian, African American, Japanese and Armenian traditions, and analyzes them in order to examine the storyteller's insight on human nature and the power of stories. It points out that:

(1) Navaho people sensed that words have the power to create balance in the world. It was so real for them that their story-singing rituals could, or were believed to be able to, heal the sick. It was also in their reality that their words could bring bad luck, if used incorrectly.

(2) The Norwegian tale, "The Twelve Wild Ducks" is about a young woman, who was prohibited her verbal and emotional expressions. It was a condition that she could free her 12 brothers from an evil spell, if she kept her silence. When she was about to be executed as a witch, she was released from the prohibition. Then she regained her place in society when the story of her life was told to the story audience thrice: once the story was spoken by the narrator, once by herself and the last time by her brothers.

(3) "Lord" in traditional African American stories has often imperfect and humorous personality. He usually does not fulfill the wishes of people. One can point out the importance of African American collective memory from slavery and the Jim-Crow times, in their folktales.

(4) The Japanese folk-Buddhist story, "Sanshoh-dayuu" or "Princess Anjyu and Young Prince Zushi-oh," introduces a Japanese version of a female sacrificial lamb. As the legend spread broadly in oral tradition, Princess Anjyu, who sacrifices herself for the life of her brother Prince Zushi-oh and the family honor, became a nonsexual folk-deity. This process proves that a legend can be merged with a folk religion to relieve the sufferings of people.

(5) The Armenian "Stone of Patience" teaches us that one can handle solitude by recounting one's life story to oneself or to the "stone of patience." The story reveals a way to happiness by conquering loneliness and accepting the antagonization of one's self in extremely unreasonable situations.

This essay is an interpretive approach to orally transmitted stories whose plots are not as logical as written stories. The seemingly illogical development of folktales allows us to attain insight into the intricacies of human nature and difficulty of stability to be realized in society.

Keywords : Folktale, Narrative, Story, Vernacular, Comparative Culture

目次

はじめに

1. 神聖な物語 —— 世界を生み出すことば
ナヴァホの「^{シングズ}Sings」
2. 私たちは物語でできている —— 「12羽の野白鳥」
ことばと感情を禁じられた姫
3. 物語がはらむ集団的記憶 —— 「黒人はなぜ黒くなったか」
頼りない神様の物語
4. 伝説の役割 —— 「安寿と厨子王」
苦しみを引き受ける少女
5. 物語ることの意味 —— アルメニアの「白雪姫」
孤独からの再生

おわりに

はじめに

Oral Literature または Oral Tradition として分類される歌や伝承物語は、人間の歴史といっしょに発生しています。英語圏の資料をみてわかることは、歌は悲しみをいやし混乱する気持ちを整理する役目を果たし、物語は人に幸福への道をイメージさせ社会秩序と並行して幸せになる秘訣を教えてきたということです。本稿は、口承文学（Oral Literature/ Oral Tradition）のうちの「むかし話」をあつかい、人々が物語にどのような力を見いだしてきたか、人間の幸福と物語はどう関連しているのかという大きなテーマへのひとつのアプローチです。

口承文学は文字文学に比して学問対象になりにくい分野として扱われてきました。その理由のひとつは、テキストが保存できない瞬間芸術の「声」だからです。もうひとつの理由は、口承文学の担い手が読み書きのできない庶民だったから、彼らの文化に研究に値する価値がおかれてこなかったということです。しかし現代では、この二つの理由は用をなしません。テクノロジーの進歩で、音声や身体パフォーマンスも資料保存できるようになりました。さらにテレビ、ラジオ、インターネットの音声・動画配信などの発達は、個人的に知らない人の声で情報を得たり楽しんだりする機会を多くの人々に開きました。デジタル機器が目覚ましく発達した現在では、私たちのことばは発信者や受け手の教育程度にかかわらず、30年前より格段に「声」（音声言語）とのつながりを深めているように見受けられます。

口承文学研究は、伝承の時代の音声言語文化が現代文化とどうかわり合っているのか、あるいは、現代人になにを再発見させてくれるのかを明らかにします。

1 神聖な物語 --- 世界を生み出すことば

私は2008年に、アメリカ合衆国のナヴァホ・インディアンの婦人、ヘレン・イエローマンさ

んと知り合いになりました。私がお目にかかったとき、すでに90歳をこえておられたヘレンさんは、ナヴァホのことばを話し、英語はわかりません。アメリカ合衆国は19世紀に先住民族の同化政策を進め、子供たちの学校教育はすべて英語で行なわれたためナヴァホ語は生活からほとんど消えてしまいましたが、彼女はナヴァホ族の居留地でナヴァホ語を使って育ったということです。草から染料をとり、糸を染めて敷物を織り、細々と生計を立ててきました。ナヴァホ語だけしか話せないナヴァホ族は彼女が最後の一人ではないかと、調査に協力してくれたベリー・トーキン氏は言っていました。彼女の子どもたちはみな、英語を第一言語としナヴァホ語は必要最低限しか話せません。

自分と同じ言語を自由に話す人が周囲にいなくなってしまったのですから、イエローマンさんはほとんど黙ってひとりで暮らしています。でも彼女は、ナヴァホ族に先祖代々伝えられた物語を何百何千と記憶している語り部（「歌い手」と呼ばれます）なのです。



Ms. Helen Yellowman (photo by Barre Toelken)

私の訪問を仲介してくださったトーキン氏は、彼女が語るナヴァホ族の物語を、長い年月をかけてテープレコーダーで録音した人です。彼はドイツ系白人のアメリカ人ですが19歳の時からナヴァホの村に住み、部族内のイエローマン家に養子として迎えられ暮らしました。後に彼は民俗学者になり、白人ではじめてナヴァホの物語を録音してもよいと許可されます。（物語は民族の歴史や知恵を伝えるものですから、部族以外の者には話してはいけないのです。）しかし、録音には条件がありました。

ナヴァホ人は、夏に物語ると悪いことが起きると信じています。ですから「夏に物語ってはいけない」というのが決まりです。そこでトーキン氏は「録音を夏に再生しない」という約束をして、部族の物語を何百リール（まだ、オープンリール・テープレコーダーを使っていた時代でした）にもわたって記録しました。「夏にテープを再生しない」という約束をした理由は、テープから再生された声とことばが不幸を呼び出してしまうからです。

トーキン氏は年をとり、脳梗塞を患って自分の死が近いことを悟ります。そのとき彼は、ナヴァホ物語の録音テープをそのまま、おばあさんになったナヴァホの語り部ヘレン・イエローマンさんに返すことに決めました。自分の死後、このテープが資料室に収められて研究資料になっ

たら、研究者たちは夏休みにテープを聞いて研究しようとするでしょう。そうしたらナヴァホ族との約束が守れないとトーキン氏は考えたのです。私がナヴァホの村を訪ねたとき、そのテープは複数の段ボール箱に入ってイエローマンさんの寝台の下につっこまれていました。寝台の下は段ボール箱で埋まっており、これほどの量のテープに刻み込まれる部族の物語とは一体どのようなものなのか、考えるだけで私は息をのみました。先祖から伝えられた悠久の時間、肉体が減びても声となっていき続けている無数の人々、彼らの命のことばが、彼女の身体と記憶に生きているのです。

でもこのテープは、イエローマンさんが亡くなったら捨てられてしまうかもしれません。何百というナヴァホ語の物語が失われるかもしれません。それでも、物語やことばと宇宙との深い関係は不可侵だと、彼女もトーキン氏も信じています。先祖から受け継いだことばがあって人間は世界とのバランスを保っているのだという感覚が、ナヴァホの伝統的な人の中にはあるのです。

その感覚を示しているのが以下のエピソードです。これは、ナヴァホの居留地で私がヘレンさんとトーキン氏から直接聞いた話です。(2007.10.28)

ナヴァホの「Sings」

伝統的なナヴァホの言語感覚では、ことばは現実的な創造力を持ちます。悪いことを言ってしまったら、それが現実になると感じます。たとえば、ナヴァホ語で *shash* (熊) は言うてはならないことばです。ほんとうに熊が現れてしまうかもしれないからです。逆に、ことばを發して病気を治せるとも信じられています。彼らはことばによって世界を現実と受け止めます。それですから、病人を救うため、ある時は一晩中、彼らは病人を苦しめている何かと戦いながら歌い続けます。神聖なことばで歌うことが病と戦うことなのです。

ところで、先に述べたようにトーキン氏は2002年に脳梗塞で倒れ、右半身不随で言語障害にもなってしまいました。記憶も喪失しました。その彼を治そうとして、イエローマン家の人々は儀式をとり行いました。ナヴァホではこの儀式を“Sings”と呼びます。内容は、私がトーキン氏から伺った話と、Barre Toelken, *The Anguish of Snails: Native American Folklore in the West* (Logan: Utah State UP, 2003) 111-112からの抜粋です。

家族がトーキン氏を中心において車座になり、歌い手でメディシンマンのジミー・デスチーニ氏氏が儀式を執り行います。儀式は深夜に行われます。物語る歌が延々と続き、英雄の双子の兄弟が父である太陽に会いに行くくだりに差しかかりました。太陽は強力な戦士たちに守られていて侵入者を撃退しようとするので、太陽に会おうとする人々は激しい戦いを通り抜けなければなりません。儀式の歌はその戦いを物語るのですが、同席している人々みんなが「実際にその戦いを経験していた」とトーキン氏は述べています。そして、病気で弱っているトーキン氏には30センチ程度の長さの石でできた防御用の武器を持たせ、頭の回りには小さな矢じりをつなげて作った鉢巻きのような物を縛ってくれたとのこと。病人だけがこれらの武器で守られ、家族はいわば丸腰です。病人は、同行する家族を守りながら太陽まで行き、それが成し遂げられれば英雄のように力を得て、健康な身体へ帰ってくるのです。帰還は「稲妻に乗っ

て帰ってきた」と歌で物語られ、言祝がれます。

As we got closer to the sun and the battle became fiercer, my Navajo family members began shouting words of encouragement like “Don’t give up!” “We’re almost there!” “Protect us with your spear!” What I had been doing for an hour during the ceremony was holding over my head a foot-long, chipped stone arrowhead, which was in fact getting heavier every second. The singer, Jimmy Descheeny, had also tied a row of stone arrowheads around my head, and I began to realize that these armaments were my means to reach the Sun and assure the safety of those traveling with me; I, the sick one, provided the only protection. After success, which was celebrated with several fourfold song stanzas, the story described us returning to earth on a lightning bolt.

ナヴァホ族の Sings に限らず、装備やことばの力を信じることで異世界に入り込み、なんらかの活動をして現世界に戻ってくる儀式はさまざまな文化に共通してみられます。つけ加えますと、メディシンマンのデスチーニ氏は、昼間はアリゾナ州の病院に勤務する医師です。私は昼食のハンバーガーを彼とご一緒したことがあるのですが、まったく普通の知的で陽気なお医者さんでした。ナヴァホ族の超自然的な儀式祭司であることと西洋医学の使徒であることは、彼の中では全く矛盾しないということでした。

2 私たちは物語でできている——「十二羽の野白鳥」

「物語を生きる」いえむしろ「物語あってこそ人間は人間たりうる」と思っていたのは、ナヴァホ族に限ったことではありません。ヨーロッパの民話では、物語の前半で主人公が同様の試練を三回受ける、そして物語の後半で彼女が自分の経験を誰かにそっくり語り直す、そのようにして同じ筋立てが二度語られるということがよくあります。むかし話がこうした繰り返しを好むのは、物語によって人間が社会的存在として構成されることと関係があります。

まず、むかし話がなぜ繰り返しを好むかを単純に考えてみましょう。声で語られた話であればページを戻して読み直せませんから、大事なことは繰り返したほうが記憶に残ります。だから民話の語り手は繰り返しを好むのだということが出来ます。一方、文字を持たなかった人々の記憶システムが文字言語に慣れた私たちの記憶システムと同じだったとは限りません。おそらく、語られたことばを記憶する彼らの能力は、私たちの音声言語記憶力をはるかにしのいでいたでしょう。ですから私は、むかし話に繰り返しが多い理由が記憶補助以外のところにあると考えます。秘密の鍵は、アメリカ先住民の物語と同じく、「ことばが現実を作り出す」という感覚にあるのではないかと。

むかし話の語り手たちは、現実の世界を繰り返しとしてとらえていました。「繰り返し」にあたる英語はいくつかありますが、この場合に一番合うのは「サイクル」という単語でしょう。季節の繰り返しもサイクルですし、子が成長して親になり老いて祖父母になり、その人の子が成長してまた親になり老いて祖父母になり・・・という世代の繰り返しもサイクルにあたります。

陽は昇り陽は沈み、人々の悲しみや喜びもまた何度か類似の繰り返しを経てゆっくりと変化していきます。

「二度ある事は三度ある」ということわざがありますが、同様な事が三度くらい繰り返してやっとな変化がうかがえるというのは、多くの民族で共通した認識なのかもしれません。民話の主人公が幸福になるには、たいてい三回の試練を受けなければなりません。グリム童話の白雪姫も、三回継母（初版では実母）の訪問を受け二回までは難から脱しますが、三回目で毒リンゴを喉に詰まらせてしまいます。こうしてみますと、民話の時代の人々は、時間を一方向に流れる川のようなものとしてではなく、単純な反復ではさらになく、循環するサイクル、あるいは螺旋状に回りながらゆるやかに動いていくものと感じていたようです。

民話に繰り返しが多いもうひとつ理由は、語り手と聞き手のリアリティ感にあります。先に述べましたが、物語では、主人公が何らかの経験をしてほぼ問題が解決したと思われた頃、舞台設定が改められて、主人公が出来事を誰かに最初から話して二度なぞりをする構造がしばしば採られます。つまり、物語がわざと繰り返して語られるのです。文字文学に慣れた私たちは、この繰り返しを無駄で退屈に感じます。しかし民話の語り手や聞き手（民話は双方の共同創作です）は、事件は語り直されてこそ経験になると感じていたようなのです。言いかえると、現実には物語になってはじめて事実と認識される——主人公が自分の声で自分を物語ってこそ事実となる——というわけです。そしてこの感覚は、真実を射ているといえます。

たとえば私たちは、誰かが悲しそうにしていたら「どうしたの」とたずねます。尋ねた人にとっても悲しんでいる人にとっても、起こった事はことばになるまで「現実」ではありません。もし「なににもなかった」とこの人が答えそのまま忘れてしまえば、その人の側だけからすればなにもなかったのです。しかしこの人が聞き手に事の顛末を物語れば、それは現実として受け止められます。実は私たちは、たとえ聞き手が実際にはいなくても、自分で自分に物語って自分の現実を構築しています。自分の物語ができないとき、私たちは混乱し「自分を見失った」という気持ちに陥ることさえあります。

ことばと感情を禁じられた姫

不当な扱いを受けても真実を話せないまま苦しむヒロインの物語は世界中に驚くほどあるのですが、なかでもアンデルセンが書いた「白鳥の王子」や「人魚姫」は胸に迫る話です。ここでは、「白鳥の王子」のもとになったノルウェー民話をとりあげ、ヒロインが物語を二度目に「語る」ことで自分を取り戻す顛末を分析してみます。

“The Twelve Wild Ducks,” *Popular Tales from the Norse*, George Webb Dasent, trans., collected by Peter Christian Asbjørnsen and Jørgen Moe, 1863 (Project Gutenberg E-Book #8933) 1836-1923.

むかしむかし、新雪が積もったある日、ひとりのお姫様が遠出をしました。少し行ったところで鼻血が出てしまい、白い雪の上に血の滴がたれました。お姫様には十二人の息子がいたのですが娘がいませんでした。

「私に娘があったらねえ。雪のように白く血のように赤い娘があるなら、息子たち全部がどうなっ

てもかまやしない。」

妃がそう声に出して言ったとたん、トロールたち（北欧神話の超自然の生き物）が現れて「娘をあげよう。雪のように白く血のように赤い娘を。そのかわり息子たちはこっちのもんだ。娘は洗礼を受けるまではおまえが預かっていい」

と言い、そのようになるのです。王子たちは野の白鳥に変身させられ、王女が生まれ「白雪・紅薔薇姫」(Snow-white and Rosy-red) と呼ばれるようになりました。

成長するとこの姫は自分の出生の秘密を知り、兄たちを探しに城を出ます。そして、さまよい歩いた末に遠い国の兄たちの隠れ家へ辿り着きます。十二人の王子は、昼間は白鳥となって空を飛び、夜になるとこの隠れ家へ戻って人間の姿になるのです。一番上の兄は、自分たちを苦しめる原因となった妹を殺そうと言いますが、一番下の兄が罪は母にあると訴えて彼女を救います。兄たちの呪いを解くためには何でもすると申し出た妹に、彼らは秘密を教えます。

“You must pick thistledown,” said the princes, “and you must card it, and spin it, and weave it; and after you have done that, you must cut out and make twelve coats, and twelve shirts and twelve neckerchiefs, one for each of us, and while you do that, you must neither talk, nor laugh nor weep. If you can do that, we are free.”

花が終わった後のアザミの綿毛を集めて梳き、糸に紡ぎそれを機に織って十二枚の上着とシャツとネッカチーフを作れというのです。そしてその間、「話してはいけない、笑ってはいけない、泣いてはいけない」。それができたら王子たちは自由になると言います。

姫が一心にこの作業に関わっているところを、その国の若い王が通りかかり彼女の美しさに心をひかれます。城へ連れて帰り結婚しますが、王の母親である皇太后が、話しもせず笑いもせず、泣きもしない若い妃を魔女だと言って嫌います。白雪・紅薔薇姫に息子ができると、これをねたんだ皇太后は赤ちゃんを取り上げて蛇がうようよしている部屋へ隠してしまいます。そして白雪・紅薔薇姫の指を傷つけその血を口になすりつけ、「自分の赤ちゃんを食べてしまいましたよ」と、自分の息子である王に告げ口したのです。姫はこれを否定することもできずにいますが、王は妻を許します。そしてまた夫婦に男の子が生まれましたが、この子も同じように隠されてしまい、姫がこの子も食べたことにされてしまいます。人肉を食べるのは、最も重い罪とされていました。それでも王は二度妻を許します。それから二人に三人目の赤ちゃんが生まれ、今度は女の子でした。この娘も妻が食べてしまったと言われた時、王はとうとう彼女を悪い魔女として火あぶりの刑に処することを決めます。

薪に火が燃え上がり、姫が磔^{はりつけ}にされようというその時に、十二枚の上着とシャツとネッカチーフができ上がり、彼女はそれを並べました。末兄のシャツの左腕だけがまだ完成していませんでしたが。その時、空から十二羽の白鳥が舞い降りてきます。白鳥はアザミの服を着て次々に人間に戻り（末兄の左腕だけは鳥のままでした）、妹が今にも火あぶりになろうとしているところへ、兄たちは彼女に全てを語るように勧めます。

‘What’s all this about?’ asked the princes.

My queen is to be burnt,' said the king, 'because she's a witch and because she has eaten up her own babes.'

'She hasn't eaten them at all,' said the princes. 'Speak now, sister; you have set us free and saved us, now save yourself.'

姫は自分と赤ちゃんたちに起こったことを、王に話します。それによって彼女の疑いは晴れ、救われます。王は、姫に冤罪をさせた自分の母親を十二頭の駿馬に縛りつけて、体をバラバラに引き裂かせました。それから、王と姫は蛇の部屋から取り出された三人の子供とともに幸せになりました。十二人の兄たちは自分の城に帰り、両親にすべてを物語ってみんなで幸せになったということです。

さて、「物語の力」というテーマでこの話を読むと、いくつか気がつくことがあります。まず、すべてのトラブルは「娘がほしい、息子たちはどうなってもいい」という母妃のこぼれから始まっています。ノルウェーの人々もことばが現実を呼び寄せると信じていたのでしょう。こうしてうかつにも母親が犯した罪は、娘の白雪・紅薔薇姫がつぐなうことになります。姫は浄罪のために、三つの試練を通り抜けなければなりません。すなわち、アザミの綿毛で服を作る、自分の子供たちを奪われた上に子どもを食べてしまったという冤罪に甘んじる、火あぶりの刑に処せられる（あわやというところで助かりますが）、の三つです。

そしてこの間彼女に課せられた義務は、感情を殺しことばを発してはいけないということです。つまり、「生きたまま自分の存在を殺せ」という課題だったのです。それを裏づけるように、服を作る作業は彼女から時間の全てを奪い取り、彼女が存在した証である子どもたちは取り上げられ地獄のような場所に隠されてしまい、最後には彼女そのものが火あぶりとなって抹消されかけます。

こうして、徐々にしかし完全に消え去るはずだった自分の存在を白雪・紅薔薇姫が取り戻したのは、彼女の人生の物語が明らかになってからです。民話の語り手は、まず起こったことを、語り手の声で一度語り、姫が王に伝えるかたちで同じ物語を姫の声で再び語り、王子たちが両親に報告するときに、王子たちの声で三度目に語っています。同じことばがすっかり繰り返されるというわけではありませんが、少女から母親になった「白雪・紅薔薇姫」と仮に呼ばれたひとりの女性の人生が、三回語り直されてはじめて彼女は完全な幸福に至ります。つまり、「経験する（語り手の語り）＝事実」「自分を作る（主人公・姫の語り）＝自己認識」「認められる（他者・王子たちの語り）＝社会での受け入れ」の三つが揃ってやっと、人は現実の世界に安定した場所を得るのです。

3 物語がはらむ集団的記憶——「黒人はなぜ黒くなったか」

人が自分のことをしゃべらないのは、「しゃべるな」と禁じられた場合だけではなく。いえむしろ、沈黙する人々はしゃべることができない環境に圧迫されている場合がほとんどです。もし自分の気持ちや考えをしゃべってしまえば、命が危険にさらされる人々が大勢います。

アメリカ黒人たちがそうでした。

アメリカへはじめてアフリカ人が奴隷として連れてこられたのは1619年、まだ合衆国はなく領土がイギリスの植民地であった時です。合衆国議会が奴隷貿易を廃止するのは1808年ですが、奴隷制がすべての州で廃止されるのはそれより半世紀以上後、南北戦争で南部諸州が敗北した1865年のことでした。奴隷制は廃止されても、南部の州で「黒人法」(ブラックコード)や「ジム・クロー」法と呼ばれる一連の差別法が制定され、20世紀後半に至るまで、黒人たちは生活のあらゆる場面で差別に苦しみ続けました。リンチが横行し、レイプの冤罪をきせられたり、態度が反抗的だと言いがかりをつけられたり、うろついていた、目線を合わせたなどの理由で黒人たちは集団的暴力の犠牲になりました。黒人を擁護する白人もまた、家に火をつけられたり暴力を受けたりしました。ジョナサン・アールによれば、1880年から1930年の間に、3220人の黒人と723人の白人が南部でリンチにあったそうです。(『アフリカ系アメリカ人の歴史』古川哲史、朴珣英訳、明石書店2000年)

こういう状況ですから、黒人たちは自分の思っていることはほとんど口に出せませんでした。その状況下で彼らは、真意を隠して表現すること、仲間だけにわかるような特殊な意味づかいでしゃべること、いつでも言い逃れが出来るような話し方をすること、事実を語らず歌や寓話の様式にあてはめて記憶を伝えること、などの言語表現技術を研ぎすましていました。

しかも、黒人の物語は笑いに満ちていました。フロリダ州出身の作家、ゾラ・ニール・ハーストンは、「黒人は身銭を切っても笑いたい人々なのだ」と書いていますが、まさしくどんな小さな事でも笑いに変えてしまうような才能を彼らは発揮しています。つらい日常を送っている人ほど、笑いや楽しみを切実に求めるのではないのでしょうか。

黒人たちの物語には、いくつかの登場人物パターンがあります。強くて権力のある人(または動物)、立場は弱いけれどもずる賢く立ち回って日常をかき回す人、それからまじめに日々を生きていて状況に合わせて敵味方を変える人々です。権力のある登場人物が必ず悪者というわけではなく、ただ普通に偉ぶったり横柄に命令したり脅迫したりするだけです。かき混ぜ役はだましたり盗んだり、人を出し抜いたりして得しようとしませんが、たいていは手痛い被害を受け、それでも自分を通します。

そうした配役を見ただけでも、黒人の物語が生活の真相をよくすくいあげているということがわかります。権力者には権力者の理屈と行動様式があり、弱者には弱者の欲望と現実があり、大衆には日和見のだが一瞬一瞬の安全を求める日常のリアリティがあります。「白人は悪い」「黒人は犠牲者だ」というような、表面的で単純な判断は決してしていません。黒人の物語には、社会の底辺で不当な扱いを受け続けた人々の世界観と、生き延びる知恵が詰め込まれているのです。そして大事なことは、彼らがそれを笑いに包んで声で伝え続けたということです。

頼りない神様の物語

次の物語は、なぜ自分たちは肌が黒いのかを説明する話です。自分たちは肌が黒いので差別され、損をしている、それはどうしてなのか。そのように黒人たちは問い、出生の運命の不公平に理由をつけて納得しようとしていました。黒人が神の秩序に応じた動きをしないので神が予定通り事を運べず、神の口からあわてて出てしまったことばが災いして自分たちは黒くなったの

だと物語は説明しています。

Zora Neale Hurston, "Why Negroes Are Black," *Mules and Men*, 1935 (Bloomington: Indiana UP, 1978) 32-33.

神は世界を作った後のある日、人々に身体の詳細を一つずつ与えました。まずは目、次は歯というように。皮膚の色を与えるべく作業を進めているとき、三時間半待っても現れない人間たちがいました。もう仕事を終わりにしたかった神は、天使のラファエルに命じてまだ来ない人々を迎えに行かせました。ようやく到着した者たちは押し合いへしあいして大混乱になったので、神は思わず「さがれ、さがれ」「Git Back! Git Back!」と叫びました。「Git Back」(Get Back)は「Get Black」(黒くなれ)に発音が似ていて、それで遅刻者たちが黒人になったのです。

この話では、時間にルーズで言いつけどおりに整列できない黒人の性質が笑われています。でも同時に、自分のペースで人を動かそうとし、几帳面すぎて思い通りに行かないとイライラして失敗してしまう、妙に人間的な神様も笑いの対象です。たしかに三時間半も待つのは私たちの感覚ではだいぶ辛抱強くなければならないことですが、電話も車もなかった19世紀の黒人にはそれほど長い時間ではなかったかもしれません。

加えて、いつも白人に指図されている黒人たちは、時間厳守で人の言いつけに従うことには価値を見出しません。奴隷が勤勉に働いても、得するのは奴隷自身ではなく主人です。その価値観が物語に反映しています。主人の都合で仕事を言いつけられ、死ぬまで苛酷に働かされていた奴隷時代の集団的記憶が物語の筋立てを左右しています。ここに表現されている黒人のルーズさは、エネルギーを温存して生きのびるための知恵だったともいえます。

地上の生活を舞台にした別の話でも、神は黒人の求めに答えず薄い煙のように存在感がありません。たとえばこんな小話があります。("Kill the White Folks" *Mules and Men*, 96-97)

奴隷時代のこと、ある男が柿の木の下で「白人をみんな殺してください」といつも神様に祈っていました。これを耳にした白人の主人は柿の木の上で待ち伏せして、彼の祈りが始まると木の中から大きな石を男の頭に投げつけました。男は気を失って倒れましたが、目を覚ました時「神様、白人と黒人の区別もできないんですか!」と叫びました。

この話には、神は出てきません。白人の主人が代わりを演じています。男は、主人にやられたと気づいていただろうけれども、主人に文句は言えないから無知を装い神様に文句を言ってます。全知全能であるはずの神が黒人と白人の区別もつかないという指摘もおかしいし、「白人を皆殺しにしてくれ」という極端な願いの感情的リアリティと、現実とは甘くないという実際のリアリティの間にあるズレも笑いを誘います。「白人をみんな殺してください」という憎しみや、自分の気持ちを告白したら痛い目にあうという認識が、黒人の集団的記憶に刻まれているのです。せめて物語の中では殺したいほどの憎しみをちらりとでも発散させ、最後は主人(神様)への抗議のひとつで物語を終らせています。

4 伝説の役割——「安寿と厨子王」

伝承物語には民話の他に神話と伝説があります。このセクションでは伝説を扱います。けれどもまず、三つの違いを説明しておきましょう。民話は、音声言語のみで生きていた人々が、どのように現実を把握したのかを物語にして表現しています。また、音声言語が主流であった時代の人々の世界観を表しています。そしてなによりも、色々な経験をしながら生きていく喜びといずれ幸せになるという希望とを保証して、幸福をつかむ知恵を与えます。

一方、神話はこの世界に存在する物質や現象および世界の成り立ちを説明しようとしします。「どういうときに雷が落ちるのか」という疑問を、科学的にではなく「神が怒ったとき」というように説明し理解するのです。神話は、文字以前の時代を生きた人々の鋭い自然観察に基づいています。ライオンや狼などの強い動物は、攻撃力に優れているばかりでなく知的な勘を働かせた行動をとりますが、それを見抜いた古代の人々は、こうした生き物の一部は「神に罰せられて人間の知性を保ったままで野獣に変身させられた」と考えました。そのように神話では、自然の現象が神々という超自然の存在を使って説明されているのです。

伝説は「この世でほんとうにあったこと」を前提に語られます。そこが民話や神話と異なるところです。主人公は特別な能力を発揮する人間で、怪物と戦って勝利する英雄が伝説のときもあれば、とても堪えられないと思うような苦難を堪え忍んだ末に殺されてしまう弱者が語り継がれるときもあります。いずれにせよ、尋常ではない経験をした人の話です。伝説は人間の物語であるだけに、伝説の主が人々の願望を担ったり、人々よりも辛い苦しみや悲しみを受けたりして、人々を勇気づけ慰めてくれるのです。

苦しみを引き受ける少女

京都府の丹後由良地方には、「安寿と厨子王」の伝説があります。この伝説は、説教節『山椒太夫』として民衆に愛され、17世紀半ばに文字に書き下ろされました。一般には森鷗外が小説化した筋がよく知られ、厨子王を助けた安寿は入水することになっていますが、伝説では安寿の行動が鷗外の話とはまったく異なります。

説教節『山椒太夫』は、丹後にある「金焼地藏」の由来を述べたものです。金焼地藏は、肩に焼きごてをあてられた火傷の跡があるお地藏さんです。苦痛をその傷で肩代わりしてくれる地藏として、いまでも地元の人々に信仰されています。

「山椒太夫」荒木繁、山本吉左右編注『説教節』（東洋文庫 243 平凡社、2009 年）

山下憲彌、小谷一郎編『由良山宝珠院如意寺』（はとプリント、2002 年）

厨子王丸と安寿姫は奥州岩城の判官、^{まさうじ}正氏の子供です。父は、意志が強く妥協しなかったので筑紫に流罪となり、子どもたちは父を知らずに育ちました。息子の厨子王は、朝廷に父の赦免を申し出て領地を回復しようと母を説得します。そして母、姉の安寿、弟の厨子王丸、供をする上臈（貴族階級の女房）の4人は旅に出ます。ところが最初の晩に人買いにだまされ、翌朝、安寿と厨子王は母や女房と引き離されて山椒太夫の屋敷に奴隷として売られてしまいます。姉弟は励ましあって堪えますが、逃亡しようと話し合っているのを山椒太夫の息子三郎に

聞きとがめられてしまいます。その罰として、姉弟は無惨に焼金をあてられ、餓死すべく閉じ込められ放置されてしまいました。それを太夫の次男である二郎がこっそり食物を運んで助け、幽閉が解かれたとき、安寿の傷は跡形もなく癒えていました。説教節には、安寿が持っていた地蔵菩薩の守護によると記されています。

二つ目の命を得た安寿はある決心を固め、弟といっしょに男仕事の芝刈りに行かせてくれと嘆願します。では髪を切れと三郎にいわれ、ぱっさり切り落とした「大童」にされてしまいます。連れ立って山へ登ると、安寿は厨子王にひとりで逃げるようにと迫ります。たじろぐ弟に、「行かないのならもう姉でもない、弟でもない」と強いことばを投げて押し出します。弟を逃がしてしまうと彼女は山椒太夫の屋敷に戻り、厨子王の行き先を問う三郎に湯責め水責め炙り責めという拷問を受けて命を落としました。逃げた厨子王は国分寺で聖にかくまわれ、姉からもらいうけた「^{はだ}の守りの^{まぶ}地蔵菩薩」に助けられて追っ手の難を逃れます。このとき、太夫の長男太郎が三郎の執拗な追跡をかわす場面があります。

このあとは厨子王の冒険物語です。聖と別れたあと厨子王は身分を隠して逃げていますが、容姿が放つ特別な高貴さを見抜く人々に取り立てられているうちに身分を明かす機会を得、ついには名誉を回復します。そして、丹後へ姉を救いに行きますが彼女がそこで拷問死したことを知り、山椒太夫一家を懲らしめます。それから蝦夷へ売られた母を救い、越後へ売られた供の女房を救い、父母を輿に乗せて故郷の陸奥へ戻ったとあります。物語の発端だった父については、再会の場面も描写はなく、ともに戻ったこと以外は語られていません。最後は、安寿の傷をいやし厨子王を危機から守った地蔵菩薩が「金焼地蔵菩薩」として崇められたことが述べられています。

『山椒太夫』は、西欧の物語フレームで読み取ると、厨子王の英雄譚です。元服前の男子が、苦勞を通過して一人前の殿（国司）になるまでが語られています。男子が子どもから大人へ移るための第一のステップは、自分を上回る存在である父親の失脚または死と、それに伴って訪れる貧困や差別など不幸の克服です。厨子王の話も冒頭紹介されるのは父親の喪失であり、厨子王は父親（＝男）の回復をめざし、まさに彼の意志によって、母や姉を伴った旅を始めています。その後、彼は母を失いついで姉とも別れて、出生によって得た保護者を全て失います。このときが厨子王の正念場、いいかえれば、自立への転換期となっています。彼はその後、自分の力で援助者を得ていきます。物語に父が登場人物として現れないのは、厨子王が回復をなかったのが自分の属性であるべき父の名誉と領土だったからで、父そのものではなかったからです。

山椒太夫の追手に迫られて国分寺の僧に助けを求めたとき、僧は厨子王を皮籠（かわご）に詰めて縦縄横縄を掛け、棟の垂木に吊っておいたと説教節にはあります。これは一種の通過儀礼と読むことができ、厨子王が棺に納められ一度死んだということでしょう。皮籠から再び外の世界へ出てきた時の厨子王は、もう子どもの彼ではなく、自分本来の身分と能力に見合った人生を切り開いていく大人の出発点に立ったといえます。事実そのあと彼は、父の名誉を回復し自らの領土と地位を獲得し、さらに、そしてここがまさに英雄にふさわしい行為なのですが、弱者をむごく扱った山椒太夫と息子の三郎を彼らのあくどさに応じた方法で成敗します。一方、

山椒太夫の息子でありながら慈悲心を保ち続けた太郎と二郎の所業には、それなりの報酬を与えました。

以上が、西欧的な物語の「読み」ですが、丹後由良地方へ実際に行くと、この伝説がどのように伝承されているかを取材すると、日本の人々は全く別の「読み」でこの話を愛してきたということがわかります。「由良の歴史を語る会」会長である飯澤登志朗さんによれば、地元の人々にとってこの話は『山椒太夫』ではなく『安寿と厨子王』のお話なのだそうです(2011.5.22)。由良山宝珠院如意寺には、肩に傷を負った安寿を祀った「身代り地蔵」(金焼地蔵菩薩)の社があり、人々の苦しみを身代わりになって引き受けてくれる地蔵菩薩は安寿と重ねて崇められています。地元の人々にとって『山椒太夫』の伝説は安寿の受難と勇気の物語です。

安寿は、降りかかる不幸を堪えなければならない人間の代表者としてそこにあります。厨子王の発案と母の同意によって始まった父探しの旅において、思いがけなくも母を失ってしまったために、姉の安寿は突然厨子王の母親としての役目を負うことになります。命を呈して弟を守る安寿の母性こそが、人々の共感の源であるでしょう。彼女は、男性を知らぬ間に母になってしまったという矛盾を抱え、処女であるとともに愛と悲しみを知る母であるという点で、聖母マリアに通じるものがあります。他方、安寿は厨子王を逃がす前、三郎によって無惨に髪を切られ女でもなく男でもない乱れ髪おわらわの「大童」にされます。このとき彼女は、狂気をはらみつつも、性別をもたない菩薩に近づいたといえるでしょう。

説教節『山椒太夫』の地蔵縁起のくだりでは、金焼地蔵のどこに焼印があるかは述べられていません。一方、由良に祀られているお地蔵様は肩に傷を負っています。しかし『山椒太夫』には、安寿がその美しい顔に焼金をあてられたとあります。もちろん額の傷は、地蔵菩薩のおかげで跡形もなく消えたと記されていますが、肩の傷についてはとくに書かれていません。なぜ安寿の顔は美しく保たれ、「身代り地蔵」は肩に傷を負っているのでしょうか。

もし安寿の額に不条理の刻印である焼跡が残ったら、この伝説を言い伝えた人々は生に希望が見出しにくいでしょう。額の傷跡を見て、この世の災いはどうしても避けられないと感じてしまう。伝説が希望を生むためには、額の傷は菩薩の慈悲によっていやされなければならず、安寿は奇跡の象徴になりました。一方、衆生の苦しみという重荷は肩の傷で担ぎ、安寿は救済の象徴にもなりました。美しい顔は身代り地蔵の女性性を、肩の傷は男性性をあらわしていて、この点でも安寿は男女の区別がない菩薩と同一視されてきたと考えられます。

ところで、森鷗外の『山椒太夫』や一部の伝説では、安寿は厨子王を逃がした後で自ら海に入水し命を絶ってしまいます。説教節では、先に述べたように彼女の行動は異なります。厨子王を逃がしたあと彼女は山椒太夫の屋敷へ戻り、厨子王がいないわけを尋ねられてもあれこれと言い逃れをして時間を稼ぎ、拷問を受けても決して口を割らず、「もし弟が山から戻れば、姉が弟ゆえに責め殺されたのだからと伝えて、弟に余分に目をかけてやってほしい」とまで言うのです。このことばはもちろん太夫側の反感を買って、彼女は火あぶりにされて息絶え、亡骸を放置されてしまいます。

わざわざ拷問を受けに屋敷に帰るといふ安寿の行動は、鷗外には不可解だったのでしょうか。また拷問のくだりは確かに残酷で、しかも安寿はたいへんしぶとく「弱くはかない」少女のイメージをはるかに越えています。しかし、安寿の伝説では安寿が自殺しなかったことがいちばん大

事な部分だと思われます。すなわち、彼女が決して生きることをあきらめず自分の存在価値を最後まで主張し、時間稼ぎをして自分の命を弟の逃亡のために最大限活用しようとし続けたこと。あたかも、飢えた聖に食されるために自ら火に飛び込んだウサギのように自分の身体を犠牲に供した安寿の話は、不合理な社会の底辺で苦しむ人々を勇気づけたのでしょう。ここでもまた、彼女の行動はキリスト教にいくらか類似を見出すことができ、人間の愚かさと残酷さの犠牲となって虐殺されるイエスに通じています。

それにしても、「安寿」とはなんという名前でしょう。「何があっても、生命は安らかでめでたい」という、驚くべき思考の飛躍は民衆の深い祈りの詩なのだと感じずにはいられません。人々は伝説を語り継ぎ、決死の意志を持つ安寿という少女の生を敬い祝福するとともに、自らの痛みを「身代り地蔵」にあずけてきたのです。一方で、受難と犠牲の役が、「少女」というもっとも弱い立場の人間に課される日本の美学には危うさがあります。「美しくも悲しい」などという言葉の陰で、安寿が体現する不合理な犠牲は許されるべきではありません。多くの人の唇が愛する物語や歌は、危険な罫もはらんでいる点を、私たちは意識する必要があるでしょう。

5 物語の意味 —— アルメニアの「白雪姫」

物語は旅をします。ある人の声から別の人の声へ、あるいは人の移動にともなって地球上のいろいろな場所へ運ばれます。その過程で、語る人の生活や苦悩に応じた話へと変化します。

日本で最もよく知られている『白雪姫』はグリム童話でしょう。継母に美しさをねたまれた少女が、殺害を命じられた男の哀れみに救われて森に捨てられ、七人の小人に助けられます。彼女は小人たちの身の回りの世話をすることと引き換えに小人の家でかくまってもらいますが、白雪姫が生きていると知った継母が変装して彼女に三度近づき、三回目には毒リングを持って訪ねてきて彼女を殺してしまいます。ガラスの棺に収められた白雪姫の美しさを、たまたま通りがかった王子が見初め、遺体を引き取りたいと申し出ます。しぶしぶこれを受け入れた小人たちの許しを得て、遺体を城へ持って帰る途中で運搬役の家来が躓き、その拍子に白雪姫の口から毒リングが吐き出され、彼女は生き返るという物語です。

グリム兄弟はこの話を仕上げるまでに六つの類話を参照したといわれています。お話はひとつではなくて、いろいろなバージョンが各地に広がっていたということです。しかも、グリムが目にしたよりはるかに多くの『白雪姫』類話が世界の広い範囲にありました。母親にその美しさをねたまれた少女が試練をこえて幸せをつかむという『白雪姫』型類話の中でも、特に遠い旅をしたのは、アメリカ合衆国で伝承されていたアルメニアのお話でしょうか。アルメニアからアメリカに移民した人が、1929年に口述した物語が記録に残っています。語り手のアカビ・ムーラディアン夫人は1904年生まれで、祖国の政治的混乱や虐殺というむごい歴史に翻弄されながら苦勞してアメリカへ辿り着き、ミシガン州デトロイトにあるアルメニア人のコミュニティで暮らしていました。ムーラディアン夫人の話では、主人公の少女は「白雪姫 (Snow White)」ではなく、「^{ぎくろ}石榴の一粒」または「^{ぎくろ}姫 (Nourie Hadig)」という名になっています。「白雪」や「石榴」というのは少女の美しさを冠した仮の名前で、姫の個人名ではなく、「美しい少女」「処女」の言い換えだと思えばよく、特別な人でなくてもこの物語の主人公であり得るというわけ

です。

『白雪姫』と『ざくろ姫』は、美しさをねたまれた少女が試練を受けて最後に幸福な結婚をするという大筋では同じですが、細部がずいぶん異なります。もっとも大きな違いは、姫の他にジプシーの少女が登場し目覚めた王子を奪ってしまうこと。この不条理によって姫が抱えた苦しみは、どのように解消されたかを物語っていることです。

Angela Carter, ed, "Naurie Hadig," *Angela Carter's Book of Fairy Tales*, 1992 (London: Virago, 2007) 200-206.

100 Armenian Tales and Their Folkloristic Relevance, coll. and ed. by Susie Hoogasian-Villa (Detroit: Wayne State UP, 1966) 84.

あるところに金持ちの男がいて、とても美しい妻を持っていました。娘もまたひじょうに美しく「ざくろ姫」と呼ばれていました。妻は、新月が昇るごとに月に尋ねていました「新月よ、私とお前とどちらが美しいか」と。月の答えはいつも「あなたが最も美しい」というものでしたが、ある日、月は「あなたのたった一人の子、ざくろ姫が誰よりも美しい」と答えます。娘に嫉妬した母（継母ではなく実母）は、夫に迫って娘を殺すように命じます。父親は娘を連れて森へ行き、置き去りにします。少女は森をさ迷ったあげく、大きな家に辿り着きます。そこには宝物がいっぱいで、美男子の若者がこんこんと眠っていましたが、ほかには誰もいませんでした。するとどこからともなく声が聞こえ、彼女はこの若者の世話をするようにと言われます。食べ物を作って彼のそばに置きその場を立ち去れば、彼は知らぬ間にそれを食べてまた眠るということなのでした。七年間彼の世話をすれば、この青年の呪いは解けるといいます。

一方母親は、新月に以前と同じ問いをして娘がまだ生きていることを知ります。そして、今度自分の手で確かに娘を殺そうと、彼女を探す旅に出かけます。この間四年の月日が流れ、さびしくて仕様がなくなった少女は、通りすがりのジプシーの団に金を与えて、自分と同じ年格好の少女を貰い受けます。そして残りの三年間は、二人が協力して若者の面倒を見ます。ある暑い夏の日に、たまたまジプシーの少女が若者をうちわで扇いでいると、突然若者が目覚めました。七年間にわたって自分を世話してくれたのがジプシーの少女だと思い込んでしまった若者は、自分が「呪いで眠らされていた王子」であることを告げ、ジプシーの少女と結婚すると言います。

この成行きをざくろ姫はつらく思いましたが、七年間彼の面倒をみたのはジプシーではなくざくろ姫であったという真実を、どちらの少女も王子に話しませんでした。王子はジプシーの少女と結婚を決める一方で、ざくろ姫が自分の世話の一部をになってくれたとは認め、そのお礼に何が欲しいかと尋ねます。ざくろ姫は「忍耐の石」が欲しいと言います。「忍耐の石」とは予言の石で、その石に向かって自分の悲しみを語ると、悲しみが真に大きければ石が破裂する、しかし悲しみがいい加減なものなら語り手自身が破裂するというものです。ざくろ姫はこの石に向かって、自分が森に捨てられてから若者が目を覚ましてジプシーと結婚するまでのいきさつを、最初から全部語っていきます。すると忍耐の石が破裂します。姫の語りを立ち聞きし、石の破裂を見て話が真実であると知った王子は、次のように言います。

「ざくろ姫よ、私があなたではなくジプシーを妻に選んでしまったのは、私の落ち度ではあり

ません。私は何も知らなかったのです。あなたが私の妻になり、ジプシーは私たちの召使としましょう。」

これを聞いた姫は答えます。

「いいえ、あなたはすでに結婚を決めて、もう婚礼の準備はできているのですから、あなたはジプシーと結婚しなければなりません。」

そうこうしている間、ざくろ姫の母は彼女の所在を知り魔女に命じて呪いのかかった美しい指輪を作らせ、王子の城へ届けさせます。ジプシーの少女がこれを受け取り、あなたのお母様からのプレゼントですと言って指輪を姫に渡します。ざくろ姫は自分を嫌って追放した母がなぜこんな美しい指輪をくれるのかといぶかりますが、ジプシーの少女が勧めるのでそれを指にはめます。その結果、彼女は目覚めぬ眠りに落ちてしまいます。王子は姫の世話をして三年間を過ごし、王子の依頼で何人もの医者が彼女を目覚めさせようと試みるのですが上手くいきませんでした。

ある日、新しく来た医者が、ざくろ姫が身につけているたくさんの宝石に目をとめ、指輪をくすねようとしてしました。指輪をはずした途端に姫が目覚めたので、医者はびっくりしてそれをまた指に戻しました。姫の眠りの秘密を知った医者は王子に掛け合って、姫の目を覚ませたら財宝をもらうという約束を取りつけ、ジプシーに命じて指輪をはずさせます。ジプシーの少女は「それはお母さんから贈られた大事な指輪です」と言って抵抗しますが、結局、指輪は取り外され姫は目を覚まします。王子と姫は結婚し、姫とジプシーは仲良しの友達になります。一方母親は、再び月に「あなたの娘、ざくろ姫、アダナのお后が誰よりも美しい」と言われ、怒りで即座に死んでしまったということです。

孤独からの再生

『ざくろ姫』の物語を大学の授業で読むと、必ず3つの質問がでます。「話を立ち聞かした王子がジプシーとの結婚をやめてざくろ姫と結婚するといったとき、なぜ彼女は断ったのか」「忍耐の石は何を意味するのか」「最後にざくろ姫がジプシーと仲良くなるのはなぜなのか」。それでは、ひとつずつ回答してみましょう。

寝たきりで反応しない若者を七年もの間世話しつづけ、その義務が終わったとき手柄は自分の召使にとられてしまい、ざくろ姫は不条理に苦しみます。しかし彼女はこの不正を王子に直接訴えるのではなく、「忍耐の石」を所望することで自分に深い苦悩があると間接的に王子に知らせます。石に自分の物語を聞かせ、結果的に王子に真実を知らせたわけです。しかし王子はジプシーから姫に花嫁候補者を換えるとき、姫が受けた苦しみは彼のせいではなかった、彼は何も知らなかったのだから、と言ったのです。姫が結婚を断ったのは、王子のこの姿勢が受入れがたいからではないでしょうか。苦しみを負わせておいて、「知らなかったから」ではすまされないと語り手は思っているのです。その証拠に、このあと呪いの眠りについてしまった姫を王子は三年間世話し続け、自ら犯した過ちの償いをします。

「忍耐の石」は、多くのことを示唆する伝承モチーフです。このモチーフを通してまずわたしたちは、苦悩した姫がいかに自分を物語りたかったかを知ります。彼女は王子の看病の途中でさびしさに堪えかね、話し相手としてジプシーの少女を引き入れましたが、ジプシーには手ひ

どい裏切りを受け傷つきました。その結果、姫は孤独の解消を安易に他人に頼らなくなったようにみえます。自分の物語は、苦悩を克服してしまうまでは他人に訴えても解決は得られず、孤独な状態で（「石」と化した自分自身を聞き手として）語るのではなければならないということを体現したのが、「忍耐の石」です。

また「忍耐の石」のくだりを読むと、人間は苦しいときどうしても自分について語らなければならないのだと思わされます。苦しみの掘り下げ方や程度がいい加減なものなら語り手のほうが破滅し、苦痛の物語にごまかしがなく、物語（あるいは聞き手である「石」）が語り手の重荷を引き受けて爆発する力をえたら、語り手は人生に新たな展開を得て生きのびることができる。真実は語られなければ自分ともども葬られるより仕方がないが、語るのは命がけだということです。語る相手を間違えたり、いい加減で語ってしまったりすると自分が滅びると「忍耐の石」は教えています。

「忍耐の石」はアルメニア伝承に独特なモチーフではなく、トルコにも同じ話が伝わっています。実際、アルメニアの『ざくろ姫』は冒頭だけがヨーロッパ伝承の『白雪姫』と共通し、あとはトルコ伝承の『忍耐の石』とほぼ同じ展開です。（Barbara K. Walker, “The Patience Stone,” *The Art of the Turkish Tale* vol.1 (Lubbock, Tex.: Texas Tech UP, 1990): 111-116.）また、2008年にはアフガニスタン出身のアティーク・ラヒーミーがフランス語で *Pierre de patience* (邦題『悲しみを聴く石』関口涼子訳、白水社) を出版しています。この小説は映画にもなりました (*The Patience Stone*, Sony Pictures Classics, 2012)。こうした「忍耐の石」のモチーフ展開をみると、人が怒りと葛藤をかかえたときいかに「物語る」ということに救いを求めるかがわかります。

さて最後の質問、なぜ姫はジブシーと仲良くなれたのかということです。自分の信頼を裏切り追いつめた者と和解するという不可解な展開は、現代風に語り直された物語からは削除されがちです。しかしわたしは、おそらくここが『ざくろ姫』の主題に関わる大事な点だと思っています。ひとりで黙って王子の面倒を見続けるという試練は、「孤独に勝たなければならない」という課題だったのではないのでしょうか。姫はそれを全うできずに、四年経ったときにジブシーを呼び入れてしまいます。その結果、王子を失うことになりました。また、忍耐の石の一件をへて王子に自分の立場が知れてからも、呪いのかかった指輪が母から届いたとき、ジブシーに相談し彼女の勧めにしたがって指輪をはめてしまいます。そのあともジブシーは姫の再生を阻止しようと動きます。

そのように、あらゆる大事な局面で姫の邪魔をするジブシーの少女であるのに、問題がすべて解決すると姫はいとも簡単に彼女と仲良くなるのです。それはなぜかという、ジブシーの少女とは、実は姫の弱さの化身、もうひとりの姫自身だからではないのでしょうか。人の幸福を邪魔するのは、他でもない自分の弱さや卑しさであると、物語は教えているのです。ですから、姫はジブシー（もうひとりの卑しい自分）と和解できたとき周囲の社会と調和のとれた幸せを手に入れました。物語はこのように、何層ものレベルで人間についての真実を私たちに伝えていきます。（ジブシーを卑しさと結びつけるのは、人権意識が発達していなかった時代の物語にはよくあるパターンです。）

おわりに

伝承物語は人間洞察の宝庫です。口承のまま記録され文芸民話として書きかえられていない話ほど示唆的で、とくに、現代の読み手には不可解、不完全と感じられる部分に鋭い観察を含んでいます。本稿で、伝承物語とことばについて私が述べたのは、次の5つのことでした。

- (1) ことばには命に影響を及ぼすほどの力があると信じられていた。
- (2) 正しく自分を物語る機会が得られれば命が救われる。
- (3) 自由に語ることを許されない人々も、物語の中に自分たちが共有した記憶をおさめて伝承する。
- (4) 物語には多くの人々の痛みや苦しみを引き受ける力がある。
- (5) 人は孤独を引き受けなければ幸せになれないが、物語ることによって孤独を対象化し自分に敵対する自分自身と和解することができる、それが幸福をもたらす。

伝承物語は、文字文学から遠いバージョンほど辻褄が合わないところが多いのですが、それは口述者の思考や観察が劣っているからではなくて、人間の複雑さを物語で表そうとした結果なのでしょう。現代の私たちは、寄り道や繰り返しがない明快な物語を好みますが、むしろそのために、現実の生活にある矛盾した発言や煩雑で不合理な現象を受容する能力と余裕を失っているのではないかと思うことがあります。本稿で行なった五つの物語の分析が、むかし話の新しい読みの扉を少しでも開くとすればうれしい限りです。